

カンボジアにおける凄惨な過去の継承に関する予備的考察

—教師教育者の経験と語りから—

A Pilot Study of the Inherited Tragic Past in Cambodia:
Analysis of Teacher Educators' Experience and Narrative

千田 沙也加[†]
SENDA Sayaka[†]

Abstract This paper analyzes the inheritance of past tragedy in the case of Pol-Pot-era Cambodia. I focus on teacher educators' experiences and narratives to identify how it was inherited within the home and the local community, how it was taught into public education, and what to hope for the next generation. The findings are as follows: 1) Both “bad and good” things were inherited from informants' family and neighbors. However, the true story of the violence of the era was not transmitted. 2) In the 1990s, modern history education, including that of the Pol Pot era, was restricted in public education. However, interviews revealed that textbooks published in the 1980s were used with the intention of propagating anti-Pol Pot ideas until the early 1990s. 3) There was a common understanding that knowledge of the past tragedy of the Pol Pot era should be transmitted in order to establish peace. For that purpose, they sought to explain its causes and effects in detail. In addition, an informant reported that inheriting knowledge of the Pol Pot's era afforded an important opportunity to contemplate the *true* democracy and the nation.

1. はじめに

今日の世界は、依然として紛争や大規模暴力、テロ、ジェノサイドの脅威にさらされている。紛争やジェノサイドは人類にとって決して過ぎ去った過去ではなく、この瞬間にも多くの人びとの命が危険に晒されている。筆者は、愛知工業大学において「人間性の探究」の授業を担当し、東南アジア地域の紛争の歴史について、その背景にあるイデオロギーとともに教育をしている。当該授業を通して、学習者自身と異なる文化を有する人びとの歴史や思想に対する深い理解の促進及び、国際的な倫理観を身に付けることを目指している。

では、これまでに紛争やジェノサイドを経験した当事国では、平和のために、いかなる過去として継承されてきたのだろうか。本稿では、カンボジアにおける民主カ

ンブチア時代、いわゆるポル・ポト政権¹期(1975-1979年)の過去を事例とし、日本に留学に来ている教師教育者を対象とした聞き取り調査から、次世代の教育に携わる彼／彼女らが、どのようにその過去を受けとめ、いかに次世代へ伝えたいと考えているのか明らかにすることを目的とする。なお、ここで教師教育者とは、教員養成機関の教育者を指す。本稿は限られた対象者への聞き取り調査に基づく考察ではあるが、彼／彼女らの経験の一端を知ることによって、凄惨な過去の継承に関する新たな視座の提示を試みる。

本稿が事例とするカンボジアは、インドシナ半島の南部に位置し、タイ、ラオス、ベトナムと国境を接する。その面積およそ 18.1 万 km² (日本の約半分) の土地に、およそ 1,530 万人が住む²⁾。世界遺産であるアンコール遺跡群が、観光客を魅了してきた一方で、近年はめざましい経済成長により、多くの日本企業が進出している。また、国際協力の分野における日本とのかかわ

[†] 愛知工業大学 基礎教育センター 非常勤講師

りも深く、ポル・ポト政権期の凄惨な過去があることもよく知られる。

カンボジアは、19 世紀後半からのフランスにより植民地化されると、近代学校教育制度など、フランスの影響を受けた近代的な制度が、都市部を中心に導入された。1953 年に独立を果たしてからは、対外的に中道政策をとり、東西両陣営から協力を引き出して都市部を中心に開発が進んだ。

1970 年、親米ロン・ノル政権期となると、農村部では、ポル・ポトを指導者とする共産勢力との戦闘が激化するようになった。1975 年には共産勢力がプノンペンを制圧し、共産主義のイデオロギーをかかげた新政権、ポル・ポト政権を樹立した。

ポル・ポト政権の政策は、近代的な人間生活を否定するものであったといわれている。都市部に住んでいた全ての住民は、農村に強制移住させられると、過酷な労働を強いられた。貨幣や宗教が禁止され、近代学校教育制度は停止された。教師や知識人は反体制側の人間とみなされ、虐殺の対象とされた。家族は解体され、年齢と性別で分けられた集団生活を行い、子どもたちもまた集団での労働を強制された。この極端な政策下において、当時の人口のおよそ 4 分の 1 にあたる 170 万人が虐殺や栄養失調、病気などで亡くなったとされている。ポル・ポト政権は、共産主義社会の達成を目指し、暴力や恐怖による支配を手段とした。そして 4 年に満たない政権期間に、それまでの社会や人びとの生活を覆し、後のカンボジアに計り知れない代償を課すこととなり、凄惨な過去として知られることとなった。

ポル・ポト政権期から 40 年以上が経過し、カンボジアに生きる多くの人々にとって、ポル・ポト政権期は、直接経験していない過去の出来事となってきた。教育現場を担う教師たちの多くもまた、ポル・ポト政権期後に生まれた世代が多くを占めている。こうした世代交代が進む一方で、ポル・ポト政権期を実体験として有する世代の人びとの社会における影響力が、未だ失われていない状況もある。

本稿では、実際にポル・ポト政権期を生きた第 1 世代から体験していない第 2 世代へ継承のあり方と、第 2 世代による受けとめ方を検討する。加えて、第 2 世代から第 3 世代への継承の期待についても考察を行う。そのために、直接ポル・ポト政権期を体験していない教師教育者を調査対象とし、ポル・ポト政権期について知った経緯と、その過去をいかに教えたいのかについて聞き取りを行った。国民教育、特に次世代の教育に重要な役割を担う教師教育者が、自国史にみられる凄惨な過去をいかに受け止め、いかに次世代へ伝えたいのかを明らかにす

ることは、国民教育を通して国家が方向づける歴史観と、国民一人ひとりが持つ歴史認識をつなぐ役割の実際に迫る研究であり、当事国による凄惨な過去の継承のあり方に新たな視点を加える意義がある。

本稿の構成は、まず先行研究の検討からポル・ポト政権期の過去の継承をめぐるこれまでの議論を整理する(第 2 節)。次に、本調査の対象と方法について述べ(第 3 節)、聞き取り調査の結果に基づき、ポル・ポト政権期についてどのように知り、そしてどのように受け止めているのか(第 4 節)、またどのように次世代に継承したいと考えているのかについて論じる(第 5 節)。最後に、本稿で明らかになった諸相をまとめ、残された課題について述べる(第 6 節)。

2. ポル・ポト政権期の過去の継承をめぐる議論

本節では、これまでの先行研究から、これまでのポル・ポト政権期の過去を巡る議論について、家族間及び地域社会での継承について、及び国家の意向を反映しやすい公教育での扱いについて整理する。

2・1 家族・地域社会

家族間での継承について、2005 年に 14-27 才の 200 人の青年を対象として調査を行った Münyas の研究がある³⁾。Münyas は、調査対象としたほぼすべての青年が、ポル・ポト政権期の凄惨な過去について知る最も主要な対象として家族の存在を指摘した。また、調査対象とした青年たちが、家族から聞いた物語について、多くの共通する内容があることが示された。それは、ポル・ポト政権期の強制移住や強制労働、飢えや家族の離散、虐殺などの凄惨な物語だったという⁴⁾。Münyas の結果は、家族間におけるポル・ポト政権期の悲惨な経験の継承を示しており、比較的良い思い出など多様な物語が聞かれなかったことと、いわゆるポル・ポト派で、実際の暴力に関与したような加害の経験などは家族間においても継承されにくい可能性を示していた⁵⁾。また、その話を聞いた青年の多くは、現実離れをした悪夢のように受け止め、なぜ虐殺が起きたのかなど質問すること躊躇する傾向にあったという⁶⁾。

家族間での継承のみならず、地域社会の人びとの間で、ポル・ポト政権期の記憶が共有されていることも明らかにされてきた。ポル・ポト政権期後の人びとの生活再建の動態について 1990 年代末から調査を行ってきた小林によると、ポル・ポト政権期後の人びとは、基本的に国家の政策的指導によって生活再建や村の復興を行ったのではなく、自分たちの判断と主体性で行ったという⁷⁾。また小林により、地域社会での記憶の共有を示唆するエピソードが紹介されている。それは、小林の調査地におけ

カンボジアにおける凄惨な過去の継承に関する予備的考察
—教師教育者の経験と語りから—

る仏教儀礼の際、来客の中に元ポル・ポト兵がいるというざわめきが、その場にいた地域住民の間で静かに広まり、そのざわめきが水紋のように消え、仏教儀礼は通常と変わらない形で進んだというエピソードである⁸⁾。このエピソードから、ポル・ポト政権期の記憶が地域社会に生きる人びとの間で、ある程度共有されて残されていることを読み取ることができる。そして公の場でポル・ポト政権期の過去を個人に問わない状況は小林の指摘する通りであるが、記憶を共有する人びとから見れば、それを伝え合うこと—静かなささやきだとしても—は日常的にあり得ることを示唆する。

2・2 公教育

では地域社会で共有される過去や、家庭で伝えられる悲惨な経験がある一方で、国家は次世代の国民の形成、つまり公教育を通して、いかにポル・ポト政権期の過去について伝えようとしてきたのかを見ていく。

カンボジアでは国定教科書制度が採られており、カリキュラムに則った各学年各教科に1種類の国定教科書が使用される。そのため、教科書やカリキュラムを検討することで、国家が提示するポル・ポト政権期の過去に対する方向づけを知ることができる。以下では、学校教育における実践レベルではなく、国家による方向づけを明らかにするため、各時期の国家体制の特徴を簡単に述べてから、これまでポル・ポト政権期について学校教育の内容、主に教科書を通していかに伝えようとしてきたのか、どのように扱われてきたのかについて概観する。特に、本稿の調査対象者の就学時期に焦点を当てて論じる。

2・2・1 恐怖と憎悪を促す教育(1979-1989年)

1979年、救国民族統一戦線とベトナム軍は、共闘してポル・ポト政権を崩壊させると、カンボジア人民共和国を樹立し、親ベトナム-ソ連の社会主義国として、国家の復興と再建を目指した。他方、カンボジア-タイ国境地帯へ移ったポル・ポト派は、国内で政府軍との戦闘を続けた。国内で紛争が続く中、ポル・ポト政権期後の新政権であるカンボジア人民革命党政権が、東側ブロックに属する社会主義体制を標榜したため、東西冷戦構造の中で西側諸国を中心とした国際機関に承認されず、国連の議席は実質的にポル・ポト派に与えられ続けていた。

こうした国際情勢を背景に、カンボジア人民革命党政権が目指した国民教育は、新しい社会主義国の建設のための教育であり、ポル・ポト政権を含む過去のすべての政治思想を否定するものであった⁹⁾。特に、反ポル・ポト思想を形成するような教育内容が含まれていたことが明らかにされている。人民共和国初期の教育内容にみられる国家像を考察した羽谷の研究によると、ポル・ポ

ト政権がいかに残酷で非道で、罪のない人々を死に至らしめたのかなどが、多く教科書に含まれていたことが指摘されている¹⁰⁾。これは、反ポル・ポト思想の形成と、残酷で非道なポル・ポト派から国民を救済した新政権として、その正当性を担保するためだと考えられる。教科書に描かれるポル・ポト政権期の凄惨な過去について、カンボジア史の研究者であるChandlerによると、こうした教科書の内容は決して史実に忠実ではなく、ポル・ポト派の存在を悪霊化(Demonisation)した表現だったとした¹¹⁾。つまりこの時期の特徴として、ポル・ポト政権期の過去は新政権の政治的な意図を孕むかたちで、酷く凄惨な内容として教育内容に含まれていた。

2・2・2 公教育での制限(1990-2008年)

カンボジア人民共和国は、1989年にソ連の崩壊、冷戦の終結とともに1990年代前半に移行期を迎えた。1989年にベトナム軍がカンボジア国内から完全に撤退すると、1991年にはパリ和平協定が調印された。また同1991年に、人民革命党はマルクス-レーニン主義を放棄し、名称を人民党と変更するなど、大きな転換点となった¹²⁾。1993年の選挙では、王族とかかわりの深いフンシンペック党が第1党、人民党を第2党とする連立政府が発足した。

政治体制が転換してから、ポル・ポト政権期の過去を巡る歴史教育の政策は大きく変化した。それは、ポル・ポト政権期を含む独立(1953年)以降の現代史が削除されたことにある。カンボジアのナショナリズムと歴史認識の研究者である新谷は、こうした現代史における歴史教育の内容を削除する動きは、政府と国内で戦闘を続けていたポル・ポト派との和解をすすめるためであるとし、ポル・ポト派幹部の投降を促すなかで、公教育でのポル・ポト政権期の過去の扱いをめぐる政治問題化するのを恐れたためであったと指摘する¹³⁾。

1998年の選挙の結果、人民党の一党体制が確立し、翌1999年にポル・ポト派幹部が全員投降または逮捕されると、公教育における現代史の扱いに新たな動きが生じた。まず1999年に、ポル・ポト政権期の内容を含む新しい中学3年生の社会科教科書が発行され、さらに2001年には、詳細な内容が含まれた新しい高校3年生用の歴史教科書が発行された¹⁴⁾。公教育の場での歴史教育に現代史が加えられたのは、およそ10年ぶりであった。

しかし、12年生の歴史教科書に新たに加筆された現代史の内容に対して、野党となったフンシンペック党は、1993年の選挙におけるフンシンペック党勝利に関する記述がない一方で、1998年の選挙での人民党の勝利が記述されているなどの批判を行い、ただちに教科書の回収

がなされて、ポル・ポト政権期を含む第 2 次世界大戦以降の全ての現代史の頁が削除されることとなった¹⁵⁾。またフンシンベック党の要求には、ポル・ポト派に関する箇所¹⁶⁾の再査定も含まれていた¹⁶⁾。

2008 年には、2001 年の教科書に 1993 年までの現代史が書き足されるかたちで新たに発行されたが、要求に含まれていたポル・ポト政権期の記述に関しては大きな変更は見られないと指摘されている¹⁷⁾。

2・2・3 現代史として (2008 年-現在)

2008 年以降、新しいカリキュラムが策定されると、2011 年にポル・ポト政権期の内容を含んだ中学校 3 年生と高校 3 年生の教科書が発行された。特に、2011 年に発行された高校 3 年生用の『12 年生歴史教科書』にポル・ポト政権期に関する詳細な内容が収められた。現行の歴史教科書の内容については、稿をあらためて論じることとする。

3. 調査の方法と対象

次に、本調査の方法と対象について述べていく。本調査は、現在日本に留学している留学生のうち、カンボジアにおいて教員経験のあるものに対してオンラインで聞き取り調査を行った。調査の方法と対象の詳細は以下である。

3・1 方法

まず 2022 年 1 月に調査の説明会をオンラインで実施し、合わせて調査への協力及び質問への回答は自由であることの同意を確認した。後日、聞き取り調査の内容を事前に知らせ、回答の準備をお願いした。2022 年 2 月に、新型コロナウイルス感染症対策を考慮してオンラインで聞き取り調査を実施した。

聞き取りでは、対象者自身の簡単な生育状況と学習経験などの基本的な情報が必ず含まれるようにし、ポル・ポト政権期の過去を知った経緯とそのときの思い、また次世代への継承における期待についての回答が共通して含むよう留意した。また聞き取りは、多様な経験や思いを汲み取るため、それぞれの回答に適宜追加の質問を行う半構造インタビュー形式で実施した。全ての聞き取りは許可を得てレコーディングを行い、1 人当たりの時間は約 1 時間を要した。聞き取りは英語又はクメール語の両方を適宜用いて行った。また聞き取りの最中に、口頭で確認が困難であると判断した地名等については、チャットに記入してもらうなどその場で確認を行い、さらに聞き取り後の質問や確認はメールを使用した。聞き取り

データは日本語の逐語訳を作成して分析を行った。聞き取り、翻訳、分析の全てを筆者自身で行ったが、言語の制約や状況把握に限界があることは否めない。

3・2 対象

本調査は、JDS として知られる人材育成奨学計画(The Project for Human Resource Development Scholarship)で日本の国立大学に留学している 4 名を対象として実施した。JDS の留学生は、「将来指導者層となることが期待される優秀な若手行政官等」とされており、カンボジアでは、多くの教師教育者がその対象となっている¹⁸⁾。また、「帰国後は、社会・経済開発計画の立案・実施において、留学中に得た専門知識を有する人材として活躍すること」が目的とされており、教師教育者である本調査の対象者は、次世代の育成への貢献が期待される¹⁹⁾。本調査は、立場や出身、専門性などが異なる教師教育者への聞き取りではあるが、公教育での長い学習経験を有し、次世代の教育への関心の高さを鑑みて、本調査に適切な対象であると判断した。

本調査で聞き取りを行った対象者の属性を表 1 に示した。表中の A 氏、B 氏、C 氏の現職である「TEC」は 4 年制の教員養成大学である「Teacher Training College」を指す。D 氏の現職である「RTTC」は 2 年間の養成課程で中学校教員養成を担う地域教員養成校「Regional Teacher Training Center」を指す。なお A 氏のみが日本の国立大学の博士後期課程への留学生であり、B 氏、C 氏、D 氏は博士前期課程への留学生であった。

表 1 調査対象者の属性

表記	性別	生年	現職	専門	教職年数
A	女	1983	TEC	教育学/ 言語学	10
B	男	1985	TEC	歴史	16
C	男	1986	TEC	ICT	7
D	女	1988	RTTC	英語	10

出典 筆者作成

表 1 に示した通り、年齢差は最大でも 5 才であるが、教職年数は 7 年から 16 年と最大 9 年間の違いがある。7 年間の教職経験である C 氏は、ICT を専門としており、ICT マネージャーとして企業に勤めていた経験がある。その後、私立大学での講師を経て、2019 年に現職である TEC での教師教育者の道へ進んだ。私立大学での教育経験と、TEC の経験を合わせて 7 年間の教職経験がある。他方、16 年の教職経験がある B 氏は、2003 年に高校を卒業した後、RTTC で 2 年間の中学校教員養成課程を経

カンボジアにおける凄惨な過去の継承に関する予備的考察
—教師教育者の経験と語りから—

て、2005年から2014年まで歴史の中学校教師として務めた。中学校教師を務めながら週末を利用して私立大学に通い学士号を取得すると、その後、高校教師／小・中学校教員養成校教師の資格を取得し、RTTCの歴史の教師教育者として務め、現職であるTECの教師教育者となった。B氏は歴史を専門とし、教育現場での経験も豊富である。調査対象者の専門性や経験の差異に十分留意しつつ、以下で調査結果の考察を行う。

4. ポル・ポト政権期の過去を知った経験

本節では、ポル・ポト政権の過去について知った経験として、家族や地域社会の中で聞いた経験と、公教育での学習経験についての聞き取り調査の結果と考察をまとめる。また、それらに加えて、その他の経験についても検討する。

4・1 家族・地域社会

先行研究の検討では、地域社会に固有の共通の記憶を有する可能性と、第2世代の青年たちが、家庭内でポル・ポト政権期の悲劇を聞く経験に着目した。

本調査の結果でも、家族からポル・ポト政権期の凄惨な過去を聞いたことが調査対象者4名全員から語られ、例えばB氏は以下のように語った。

質問者：初めて話を聞いたのはいつですか。何歳くらいのおときですか。

B：小学生のときです。彼ら（両親・祖父母）から初めて聞きました。とても大変な状況だったことを聞きました。長時間の労働、食べ物が無い、きれいな水が無いなどです。

B氏と同様に、A氏、C氏、D氏もまた、自身が小学生のときに家族から聞いたという。また、A氏、C氏、D氏は、比較的悲惨な体験をしていなかった話についても聞いていた。C氏は、以下のように語った。

質問者：あなたの両親や祖父母は、あなたに経験を話しましたか。

C：ええ、もちろん。家族はみんな、私によく民主キャンプチア時代の話をしました。それは私が本を読んで知るよりもずっと多い頻度でした。彼らの民主キャンプチア時代の経験についてです。

質問者：どんな話が覚えていますか。

C：悪い話や良い話。彼らが言ったのは、オンカー²⁰⁾が残忍で、人を簡単に殺すような人だったとか。ちよっ

としたミスで簡単に人を殺すような人たちだったこと。日常的に食べ物がほとんどなかったとか。だけど、私の母親は、食べ物が少ないときにも他の人よりもより多くの食料を受け取っていたそうです。

上のC氏の語りから、家族からたびたびポル・ポト政権期の話を知っていたことが分かる。また、内容である「悪い話や良い話」として、オンカーと呼ばれるポル・ポト派の残虐性と、母親が受けた良い経験が合わせて語られた。家族から聞いた「悪い話や良い話」は、C氏にとってどちらもポル・ポト政権期の経験の重要な要素と位置づけられていると考えられる。D氏もまた、母親の経験はそこまで悲惨ではなかったとし、父親の経験と合わせて以下のように語った。

D：私の母の話は…。彼女はそんなに大変ではありませんでした。大変ではないグループだった。だけど、私の父は大変でした。父は、やらなければならない仕事が多くて、さらに危険な仕事が多かったそうです。父はお腹がすいてお腹がすいて、お芋を盗んでしまったそうです。それが知られてしまい、殺されそうになったそうです。だけど、父は…、詳しくは知らないのですが、何かの長をしていた人の子供もだったそうで、守ってもらったそうです。父は全般的に生活がとても大変だったみたいです。母はそんなに大変ではなかった。なぜなら、母のいたところの仕事はそんなに大変ではなかった。

上記の語りは、D氏の父親の辛い経験と助けられた経験、また母親の「そんなに大変ではない」経験をそれぞれ聞いたことが分かり、D氏はどちらの経験もポル・ポト政権期の家族の経験として受け止めている。先行研究では、一辺倒の悲劇的な話が語られたとされているが、本調査では多様な家庭での継承があることが示唆された。

また、A氏には両親以外の親族や隣人など、地域の人びとから様々な話を聞いた経験があった。A氏は、カンボジア国内の大学院修士課程に在籍中、言語学を専攻しており、その際に自身が生まれ育った村で調査したという。A氏は、村の人びとからポル・ポト政権期の歌を教わるなど、当時よく使われていた単語（例えば「オンカー」など）を調べて、その時代に固有の意味を研究したという。そうした経験から、村の人びとのポル・ポト政権期の生活について多く聞く機会があり、多様な経験と多様な価値観を知ることとなった。例えば、A氏は以下のように語った。

A：そこまで悲惨な経験をしていない人もいました。あ

る村では、食べ物も多くもらっていました。またある村の村長は、村の人びとにおかゆではなく、ご飯を食べさせていたようです。労働も長時間ではなく、虐殺のないところもありました。ただ、素行の悪い人は場所を移動させたそうです。1年、2年で場所が変わることがありました。場所が変われば状況も変わります。もちろん中には子どもや兄弟、両親を亡くした経験を私に話してくれた人もいました。(中略) 年配の人びとのなかには、クメール・ルージュ²¹⁾時代は皆が農民で労働者、皆が平等だったので、戻りたいと言う人もいますよ。

上記の A 氏の語りは、一般的に凄惨な過去として理解されてきた枠組みと異なっている。ポル・ポト政権期に「村の村長」である立場の人は、いわゆるポル・ポト派の人物であり、暴力や恐怖で支配してきたと理解されてきた。しかし、A 氏の語る村長から残虐な人間性は読み取れない。また A 氏は、ポル・ポト政権期に「戻りたい」という話を聞くなど、ポル・ポト政権期の「良い話」に耳をかたむけて受け入れている。加えて、A 氏によると、こうした多様な側面をもつ継承が、家族や地域社会における重要な点であり、公教育制度を通して教わる内容と異なる点であるとした。

4・2 公教育

では次に、調査対象である 4 名が、公教育を通してポル・ポト政権期の過去を知った経験について検討する。先述した通り、1990 年代には歴史教育におけるポル・ポト政権期を含む現代史の削除、そして 2000 年代にも 12 年生での歴史教科書の現代史が削除されており、公教育において制限されてきた経緯があった。表 2 に調査対象者の就学時期を示した。いずれも小学校から高校卒業までのあいだが 1990 年代から 2000 年代中旬となっており、詳細な現代史が 12 年生の教科書に記載されるようになった 2008 年よりも前である。

表 2 調査対象者の就学時期

表記	小学校	中学校	高校
A	1989-1995 ²²⁾	1995-1998	1998-2001
B	1991-1997	1997-2000	2000-2003
C	1992-1998	1998-2001	2001-2004
D	1994-2000	2000-2003	2003-2006

出典 筆者作成

しかし聞き取り調査の結果、4 名全員が学校でポル・ポト政権期の凄惨な過去について学習したこと、そして

大きな衝撃 (C 氏、D 氏) や、焦燥感 (B 氏)、疑問を抱いた (A 氏) という。A 氏は特に小学校での学習経験について以下のように語った。

A: 私が小学生のとき、教育省が準備した教科書にはクメール・ルージュについての内容がたくさん含まれていました。教科書にはクメール・ルージュを憎む内容がありました。例えば、クメール語の教科書には、クメール・ルージュが国民を殺害する内容がありました。

(中略) 私の経験では、教科書が 2 回変わりました。1 回目は 5 年生のときで、クメール・ルージュを憎むような内容から、現在の国民の生活についての教科書に変わりました。古い教科書はもう今は捨てられてしまいました。なぜなら私が言語学の調査で調べようとしたとき、探しましたが、見つかりませんでした。私は教科書を読むのが好きだったので内容を覚えています。

上の A 氏の語りによると、小学校のときに学校で使用していた教科書にポル・ポト政権期の凄惨な内容が含まれていたことと、その教科書は A 氏が 5 年生である 1995 年ごろに変更されると、現在ではほとんど手に入らないとされる。1990 年代になってからも、小学校で使用されていたとされる「古い教科書」について、C 氏は以下のように語られた。

C: たしか (ポル・ポト政権期について小学校では) ほとんど全ての教科に含まれていました。

(中略)

C: 中学校ではより詳しい内容を習いました。

(中略)

質問者: 小学校のときの先生はどのように教えましたか。

C: 小学校のときに使っていた教科書は古いものだった。1980 年代に作られた教科書だった。内容には民主カンブチアの内容がありました。

先述した通り、A 氏によれば「クメール語」の教科書に含まれていたと語られたが、C 氏は「ほとんど全ての教科」にポル・ポト政権期についての内容が含まれていたという。また C 氏は、小学校のときに使用していた「古い教科書」が 1980 年代に作成された教科書だったと認知していた。1989 年から 1990 年代前半は、カンボジアの政治や社会の移行期であり、たとえ歴史教育を制限しても、クメール語やそれ以外のさまざまな教科に含まれているポル・ポト政権期の内容についてまで、教育現場の実践レベルでは規制が徹底されていなかったと考えら

カンボジアにおける凄惨な過去の継承に関する予備的考察
—教師教育者の経験と語りから—

れる。つまり、ポル・ポト政権期の凄惨な過去について、歴史教育としてではなく、他の教科の内容に含まれるかたちで学習されていたと推察される。

また歴史学の学士号と修士号を有し、現職で歴史を教える立場にある B 氏の認識では、「古い教科書」の内容には問題があったとして、以下のように語った。

質問者：あなたは学校で初めて（ポル・ポト政権期について）知ったのはいつですか。

B：小学校です。その当時のカリキュラムにあった内容はただポル・ポト時代の暴力でした。それを批判するのはこのカリキュラムは削除されました。それは…私が小学校に就学期間中でした。歴史教育の観点からいうと、このカリキュラムは良くなかった。なぜなら、この歴史が子どもたちに、他者への怒りを駆り立てるものだったからです。

B 氏によると「古い教科書」が良くない理由として、他者への怒りを駆り立てるもの、つまり平和のための教育ではなかったと受け止めていた。

他方、D 氏は学校での学習経験について A 氏、B 氏、C 氏とは異なっていた。まず、D 氏から小学校での学習経験は語られなかった。D 氏以外の 3 名の経験から、1995 年ごろに教育内容が転換したと考えられるが、D 氏は 1994 年に小学校に入学しており、小学校で「古い教科書」を使って学習した記憶がほとんどない可能性が高い。D 氏はポル・ポト政権期について中学校の歴史の授業で学習した経験について以下のように語った。

質問者：中学校で学習した際は、それほど詳細ではない。教科書に沿って教わったということですか。

D：それは…、私は 7 年生、8 年生、9 年生で教わった先生が違って、先生によって教え方が違います。ある先生、その時代を生きてきた先生は、教科書には少しの内容しかなくても、その先生自身の経験などとてもたくさん教えてくれました。そうではない先生もいて、教科書に沿ってのみ授業をして、質問してもあまり答えてくれない先生もいました。

上記の D 氏の語りは、授業を担当した教師の裁量による多様な教育のあり方を示唆する。これまでの先行研究では、1980 年代の反ポル・ポト思想の形成を目指す教育と、1990 年代の現代史教育の制限という側面が強調されて議論されてきた。しかし本調査では、1990 年代中旬に新しいカリキュラムが作成され、新しい教科書が準備されるまでは、1980 年代の教科書が使用される状況があっ

たこと、そして、現代史が慎重に扱われていた 1990 年代であっても、教育現場にいる教師の裁量による多様な継承の可能性が明らかとなった。加えて、反ポル・ポト思想の形成につながる内容は、「他者への怒り」につながる良くない教育であるという受けとめ方もみられた。

4・3 その他

その他のポル・ポト政権期の凄惨な過去を知る機会として、テレビとインターネットについて C 氏により語られた。インターネットは、成人してから自らが検索をして情報を収集した経験として語られたが、テレビは子どものときから身近なメディアであったことが以下のように語られた。

質問者：テレビやインターネットの情報は大人になってから得たものですか。

C：テレビに関しては、小学校からずっと見ています。なぜならテレビは自宅で唯一の情報を得る手段だったからです。よく知られているとおり 1 月 7 日²³⁾には毎年ドキュメンタリー番組が放送されます。また多くの映画が放送されます。それは 1 月だけではなく、クメール正月²⁴⁾にも放送されます。

質問者：毎年、国民が見るのですか。

C：そうです。そういったドキュメンタリーは、国営放送で流されます。

質問者：国営放送ですね。それはインターネットとは違いますね。

上記の C 氏の語りから、テレビで毎年ポル・ポト政権期の凄惨な過去について目にする機会があることが伺える。C 氏への聞き取りでは、筆者は広くカンボジアの人びとが目にすることを想定して「毎年、国民が見る」か質問をしたが、今回聞き取りを行った 4 名のうち、C 氏以外の 3 名はテレビを重要なメディアと捉えられていなかった。例えば、A 氏はテレビのあり方について「一つの側面」とし、毎年映像が放送されるが、単にそういうものとして受け止めており、大きな影響を受けていなかった。また D 氏は、ポル・ポト政権期に関するドキュメンタリーなどのテレビをあえて見ないようにしていると言い、「私はそんなに歴史が好きではありません。悲しい、悪い気持ちになります。知りたくないし、見たくないのです。」と語った。

本調査では、限られた対象への聞き取り調査ではあるが、実際の凄惨な過去を経験していない第 2 世代の認識として、家庭や地域社会、公教育での情報のみならず、テレビやインターネットからも知る機会があり、社会的

な記憶の枠組みとしての影響を受けている可能性が示唆された一方で、情報へのアクセスを自身で選択できるメディアの影響については、個々人の違いが大きいことが推察された。

5. 次世代への継承について

4 名の調査対象者たちは、次世代へのポル・ポト政権期の凄惨な過去の継承について共通して、平和のため、もう 2 度と繰り返さないために、という想いを述べた。そこで、平和のために具体的にどのように継承していきたいと考えているのかを尋ねると、ポル・ポト政権期の背景の政治、経済、社会などの状況を含めて伝えることの重要性が、A 氏、B 氏から聞かれた。

B 氏は、「凄惨な過去を学び分析すれば、未来に備えることができる」とし、ポル・ポト政権が権力を持ったことの「原因と影響について学ぶ必要がある」とした。その上で、カンボジア国内の状況のみならず、他国との関係も伝えることを重要視していた。B 氏によると、ポル・ポト政権期に起きた凄惨な出来事だけに焦点をあてて、平和や人権を考えるのではなく、より総合的な理解と共に継承していくことが重要であるとした。

またポル・ポト政権が成立した原因や影響を伝えることの重要性について、A 氏は以下のように語った。

A: 自分は大人になってからも多くの問題が心に残り、とても苦労をしました。だから私が次世代に伝えたいことは、詳細が分かるように伝えたい。何が悪いことだったのか。だけど、なぜその問題が起こったのか。国外で何があったのか、その影響は何か。また政治や文化が与えた影響なども。

またこうした継承は、学校のみではなく「どこでも」すべきであるとし、A 氏は以下のように語った。

質問者：先生は、大事なのは学校で勉強することだと思いますか。

A：どこでも。どこでもです。

質問者：家庭や、組織や、村など、全部。

A：そうです。どこでも。ただ、場所や状況によっておそらく伝え方が違うでしょう。例えば、学校の教師であれば、理論的な話や特徴を明確に話すでしょう。しかし、例えば私たちが村の中で話すとしたら、違うでしょう。村の人たちは私たちより、知らないこともあるでしょう。一般的な理解の促進と、中立的であることが必要です。例えば、悪いことを話すけれど、悪いだ

けではなく、良いことにも言及する。

上の A 氏の語り方は、学校では理論を含めて明確に次の世代に伝えていくことが必要であるとする一方で、村レベルでは、共通の歴史認識の有無へ注意を払うことや、中立的であることを重視している。

また、A 氏は「次世代が、国民であることの意味を自分自身で考える機会を与えたい」とし、「民主主義とは何かを考えさせるように伝えたい」とした。A 氏の語り複雑で、筆者のクメール語能力から翻訳しきれない内容もあるが、それはクメール語の「民主主義」が、ポル・ポト政権期に掲げられた「民主カンプチア」の「民主」と共通することによる。A 氏は、自身がポル・ポト政権期の過去と向き合い探究する中で、「民主カンプチアの中に民主ということばがあるが、私は本当の民主主義とは何かを考えた」という。また、日本の民主主義との比較も重要だと捉えていた。すなわち A 氏は、平和のためには民主主義が重要であり、民主主義とは何かを深く考えるためにも、ポル・ポト政権期—民主カンプチア—に起きた「悪いこと」とその背景を詳細に伝えることの重要であると位置づけている。

6. おわりに

本稿は、カンボジアのポル・ポト政権期を事例とし、4 名の教師教育者を対象とした聞き取り調査から、凄惨な過去の継承のあり方について考察を行った。特に、家庭や地域社会でいかに継承され、公教育ではどのように学んだのか、そして次世代への継承に何を期待するのかに焦点を絞って検討した。

明らかになったのは、主に以下の 3 点である。

1 つ目に、先行研究では悲惨な過去のみが継承されていると指摘されていたが、本稿では家庭や地域社会でポル・ポト政権期の出来事における「悪いことと良いこと」がともに継承されていたが明らかとなった。ただし、先行研究の指摘と同様に、暴力や恐怖で支配した当事者の経験を聞いたものはいなかった。この点は、今後も調査が必要である。加えて、本調査は限られた対象への聞き取りであり、新たな視座としてポル・ポト政権期であった「良いこと」の継承を析出できたが、こうした継承のあり方と、カンボジアの社会的な記憶の枠組みと関連した深い考察はできていない。この点も今後の課題である。

2 つ目に、ポル・ポト政権期の過去を含む現代史の歴史教育が制限されていた 1990 年代の公教育の現場において、1990 年代前半までは、1980 年代に反ポル・ポト思想を形成する意図で作成された教科書を使用していたこ

カンボジアにおける凄惨な過去の継承に関する予備的考察
—教師教育者の経験と語りから—

とが明らかとなった。また聞き取りでは、この教科書に対して平和のための教育として良くないという認識が聞かれた。

3 つ目に、ポル・ポト政権期の過去の継承は、平和のためになされるべきであるという共通する認識があり、そのために原因と影響など詳細に伝えるべきであるという考えが示された。特に A 氏の考えでは、次世代へのポル・ポト政権期の凄惨な過去の継承は、「民主主義とは何か」を深く思考する機会となることを期待するとともに、「国民であること」—カンボジア人としての生のあり方—を考えさせる学びとなることを期待していた。ただし、こうした考えは、あくまでも日本に留学に来るような優秀なエリートの思想であるともいえる。カンボジア社会の実情を捉えられないのが、本調査の限界である。本稿で明らかとなった新しい視座を踏まえた上で、ローカルな人びとや教育現場を担う教師たちが、どのようにポル・ポト政権期を受けとめて、次世代への継承に期待しているのかは今後の課題である。

謝辞

本研究は、本研究は JSPS 科研費 21J01567 の助成を受けたものです。

調査に際し、広島大学大学院人間社会科学研究科・准教授の牧貴愛先生には、多大なるご協力をしていただき、広島大学大学院の Tep Vandy さん、Eng Mey さんには調査のアレンジを助けていただいた。ここに記して謝意を表す。

注

- 1) 1975 年 4 月から 1979 年 1 月の民主カンブチア政権はその指導者であるポル・ポト（本名：サロト・サル）の名をとってポル・ポト政権ともよばれているため、本稿でもポル・ポト政権と表記する。
- 2) 外務省 HP「カンボジア王国：一般事情」
[<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cambodia/data.html>]
(最終閲覧日 2022 年 2 月 17 日)。
- 3) Münyas. 2008. 413-439.
- 4) *Ibid.* 416-417.
- 5) *Ibid.* 418-419. ただし、家庭内で語られていないのか、調査者に対して語らないのかを検証することは難しい。たとえば、カンボジアの稲作農村において、家族や親族構造について調査研究を行った高橋の研究では、ポル・ポト政権期の村のリーダーへの聞き取りが事実上拒否され、また殺人に関与したとされる村人についての情報があいまいにされたとい

う。高橋美和. 2001. 213-274 頁.

- 6) Münyas. *op.cit.*, 417.
- 7) 小林知. 2015. 109-110 頁.
- 8) 同上、111 頁.
- 9) 千田沙也加. 2017. 175-193 頁.
- 10) 羽谷沙織. 2011. 559-580 頁.
- 11) Chandler. 2008. 362-363.
- 12) 山田裕史. 2009. 20 頁.
- 13) 新谷春乃. 2020. 87 頁.
- 14) 同上、87 頁.
- 15) 新谷春乃. 2015. 6-7 頁.
- 16) 同上、7 頁.
- 17) 同上、7 頁.
- 18) 国際協力機構「人材育成奨学計画（The Project for Human Resource Development Scholarship）」
[https://www.jica.go.jp/activities/schemes/grant_aid/summary/JDS.html] (最終閲覧日 2022 年 3 月 4 日).
- 19) 同上.
- 20) 「オンカー」とは、ポル・ポトを指導者（書記長）とするカンブチア共産党の党員を指す。地方を直接支配した人びとが、自らを「オンカー」と名乗り支配していた。
- 21) 「クメール・ルージュ」とは、ポル・ポトが指導者であるカンブチア共産党が地下組織であったときに、政権を握っていたシハヌークによって呼ばれた名である。いわゆるポル・ポト派と同じ意味。
- 22) カンボジアの教育制度は 1988 年から 1996 年まで小学校は 5 年間であったが、A 氏は小学 5 年生で学校の教育の質に問題があったことで、都市部の小学校へ転校したという。転校した際に、再度 5 年生となり留年をしたため 6 年間就学した。
- 23) 1979 年 1 月 7 日にポル・ポト政権が崩壊したことから、1 月 7 日は勝利記念日として国民の祝日となっている。
- 24) カンボジアにおける新年のお祝いは、クメール正月と呼ばれ、毎年 4 月 13 日又は 14 日からの 3 日間で行われる伝統的な行事である。

参考文献

- (日本語)
- 小林知. 2015. 「紛争とその後の復興が教えること—1970～93 年カンボジア紛争」『国際協力と防災—つくる・よりそう・きたえる』牧紀男・山本博之編（災害対応の地域研究 第 3 巻）. 京都大学学術出版会. 91-124 頁.
- 新谷春乃. 2015. 「現代カンボジアにおける政治指導者像構築の試み—国定歴史教科書と 2013 年選挙キャン

- ページの分析を中心として」『AGLOS : Journal of Area-Based Global Studies』(Special Edition 2014) . 1-21 頁.
- . 2020. 「若者層に対する人民党の諸戦略：締め付け、取り込み、記憶の政治」『カンボジアの静かな選挙：2018 年総選挙とそれに至る道のり』アジア経済研究所. 81-95 頁.
- 千田沙也加. 2017. 「ポル・ポト政権期後のカンボジアにおける国民教育像—機関紙『カンプチア』にみられる教育言説の分析から—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第 64 号第 2 号. 175-193 頁.
- 高橋美和. 2001. 「第 5 章カンボジア稲作農村における家族・親族の構造と再建—タケオ州の事例」『カンボジアの復興・開発』天川直子編. 日本貿易振興会アジア経済研究所. 213-274 頁.
- 羽谷沙織. 2011. 「ヘン・サムリン政権下カンボジアにおける教育改革と教科書にみる国家像」『立命館国際研究』23(3): 559-580 頁.
- 山田裕史. 2009. 『カンボジア人民党の特質とその変容(1979-2008 年)』. 上智大学文化研究所. (英語)
- Chandler, David. 2008. Cambodia Deals with its Past: Collective Memory, Demonisation and Induced Amnesia. *Totalitarian Movements and Political Religions*. Vol.9, No.2-3, 355-369.
- Münyas, Burcu. 2008. Genocide in the minds of Cambodian youth: transmitting (hi)stories of genocide to second and third generations in Cambodia. *Journal of Genocide Research*. Vol.10(3). 413-439.

(受理 令和 4 年 3 月 18 日)